



You Ain't Heard Nothin' Yet ! ヤー!

2月は『スノードロップ』

Vol.33 2022.2.10 えんじょい工房・『YAH!』編集室

やたらと謝らないで!

誰が責めるといふのか、謝罪さえも言い訳に聞こえる。“俄か応援団は、心無い非難の発信者に急変する。”そういうことなのだろうが、そんな者として扱われたこと自体が不愉快であって、日の丸を背負っているからといって、それほど大きな責任を負わせているわけでは決してない。確かに半世紀前にはそんな風潮もあったかもしれない。何かを高揚させるために利用されたのだろう、悲劇もあった。もし今だに一方的に責め立てるようなことがあるとすれば、それは単なる憂さ晴らしであって、相手にするようなことではない。むしろ、“有言実行”とか言って、自身を奮い立たせるためか、事前に目指すところの“結果”を提示してしまうことが、正しいことなのか、不遜にも思え、見せられる者としてはどう反応してよいかかわからない。どんな結果であろうと、本人としては受け入れ、周囲はとやかく言わない。そんな謙虚さで行儀の良さが望まれる、いやそれが普通のことだと思っただが……

【こんな唄に出くわした②】
晩夏

梶芽衣子である! 『さそり』よりも、個人的には『鬼平犯科帳』のおまさ役につきる。昭和の時代の『怨み節』も悪くはないが、こんな唄に出くわした。二〇一〇年発売というから、比較的最近のものらしいが、ヒットした形跡は少なくとも記憶にない。歌い手によって、ジャンルが変わってしまうのかもしれないが、決してどこにも属さない、まさに“梶芽衣子”の世界に引き込まれてしまう。

作詞：吉田旺
作曲：杉本真人
唄：梶芽衣子

夏の日の幻 指先で弾けば
さらさらと砂の上に
くずれ落ちて 日暮れ
紅の渚に 秋風のくちぶえ
ヒューヒューと体の中
逆さに撫でる
風よ 起こさないで
眠りかけた 愛の記憶を
風よ うたわなないで
さむい名残り歌は
アデューアデュー……
夏よ

【こんな映画を観てきた】

『いちご白書』
The Strawberry Statement
-1970/米-
監督:スチュアート・ハグマン

半世紀も昔のことである。上京した時には、すでに学生運動は“末期”だったが、それでもまれにキャンパス内を様々な色のヘルメットをかぶった集団が闊歩していた。しかしあくまでも緩い雰囲気だったことを微かに記憶している。事の発端は、児童公園閉鎖に反対することだったが、やがて大事になって、最後の『サークルゲーム』、そしてサイモン(ブルース・デーヴィスンが警察(権力)に向かって跳びかかったところでストップモーション、あのヒット曲が流れてエンディングである。

スノードロップ
(待雪草:マツユキソウ)

なんともロマンチックというか、天使が触れた雪の化身という伝説が由来の洒落た名前だが、まだ雪が解けやらぬ頃に白い花を咲かせる、春を告げる花『待雪草』となると味わい深くも趣がある。ということになる。同じ花だが、見た目と心象としての、感じ取り方の違いであろう。白い下向きの花を一輪咲かせる様子は、その名の通り可憐である。